



試し読み

俺にはもう おまえしかいない

「彼女ほしー」

学食の貧乏学生の味方、安くボリューム満点のきつねうどんを前にしながらも、食がすすまず、箸で厚揚げをつまみ、ため息をついた。

顔をあげても、狐の耳をつけた美女はいなく、いや、でも、顔立ちの端正さは劣らないイケメンが、コロッケを頬張っている。

咀嚼するイケメンは応じず、隣の奴が「また、フられたのか」と呆れたのに『また』じゃない！大体、いつも告白すらできない！」と我な

がら虚しくなるような、反論をする。

中学で思春期に差しかかってから、大学三年に至るまで、恋人ができたことがない、我は童貞。

ふつーに女子に関心があるし、ふつーに欲情をするし、その上で、節度を持って接するから「話しやすい」「おもしろい」と親しまれているはずが、先もぼやいたように、告白の段階まで辿りつけたことがない。

相手と距離を縮め、親密になって「これはいける」と踏みだそうとすると、たいてい「気になる人がいて」と相談されたり「いい人ゲットできそう!」と自慢される。

まあ、そうして出鼻を挫かれ、すぐに諦める俺も俺なのだけど。

「にしたって、こう、立てつづけだとなあ」とまた、ため息をつき、厚揚げを噛もうとしたら「合コンで知り合った子か？」と聞かれた。

コロッケを飲みこんだイケメン、幼馴染のオサムに、だ。

「そーそー。

シャイな子だったから、ひそかに連絡交換して、じっくりゆっくり仲良くなっていこうとしたのにさあ。

昨日、急に『彼氏ができそうなんです。ごめんなさい』って連絡きて、それから、一切、応じてくれなくなったんだよー」

耳たこな失敗談を茶化さないで「そりゃ、ひどいな」と宥めてくれるオサムは、見た目がとびぬけてのイケメンなら、高校から彼女一筋と

いう心もイケメン。

周りに彼女を紹介せず、幼馴染の俺にさえ、名も顔も教えてくれないあたり、かなりの秘密主義とはいえ、それはそれで「よほど彼女を大切にしているんだ」と女子の株を上げているとか。

モテるのを鼻にかけなければ、彼女の自慢をせず、惚気もしないし、他の女子になびいたり、浮気もしない。

と、女子だけでなく、ひねくれやすい童貞にも、ありがたい存在とあって「なんか、俺、呪われてんのかなあ」とつい愚痴ってしまう。

味噌汁をすすったオサムが口を開こうとして「おっはよー二人ともー」と挨拶が降ってきた。

ふり向いて見上げれば、これまた、目が覚めるようなイケメン。

「おはよお、じゃないよ。また寝坊か？」

「朝、弱いんだから、しかたないじゃない！
ていうか、あんたこそ、寝起きみたいに、顔色悪いわよ！」

口調からして、お分かりの通り、もう一人のイケメンにして幼馴染のヨイチは、オネエ。

小学校中学年から、この調子だけど、いや、あらためて聞いたことがないから、本当のところは分からない。
キャラなのか、女になりたいのか、恋愛対象はどっちなのか、どっちもなのか。

少なくとも、幼馴染トリオの間に恋愛沙汰を持ちこんだことはない。

ジェンダーが曖昧で、オサムと同じように秘密主義だけど、長いこと問題なく親しいまま。

個人的には、オネエキャラに助けられているところもある。

「いやいや、ファーストキスだから！しかも、いきなりエロいやつって！」とツツコみたいところ、舌がもみくちゃにされて、もごもごと言葉にならず。

息つかせないよう、口づけしつつ、指で耳の縁をなぞったり、顔の輪

郭を撫でたりと、上級テクニクを施されては、二十二年彼女なしの童貞が抗えるわけがない。

早々、白旗をふって、されるがまま「ふあ、あ、んあ・・・」と、すっかり乙女気分にくっつきとる。

酒と傷心で、やけにもなっているのだろう。

「初めてで失敗するより、上級者に実践で習うほうがいいかも」といつそ割りきって、粘着質に舌が絡んでくるのを受けいれつつ「にしても、がつつくなあ」と薄目に見やった。

泣きそうなのを、耐えるように目を瞑り、遮二無二、口に吸いつくさまを見て、また胸をきゅんとする。

シ
ヨ
タ
の
叔
父
に
キ
ス
を
さ
れ
た
ん
だ
が



俺が二十歳のときに、十歳の叔父がいるのを知った。祖父の葬式のとくにだ。

ちようど十年前あたりから、さらに偏屈になった祖父が、親戚を寄せつけずにいたとはいえ、まさか隠し子を設けていたとは。

最期まで祖父が隠し通したものだから、親戚一同、実家にもどったところ、隠し子と初体面する羽目に。

隠し子、梢（こずえ）がいうには、物心がつく前に、亡くなった母親

の記憶はなく、その名も素性も、祖父は教えてくれなかつたらしい。

込みいった事情があるにしろ、自分のほうが先立つとなれば、後先のことを考え、情報開示の準備をしておくべきところ、あの偏屈爺、遺言書どころか、梢や母親について知れる手がかりを一切、残さず。

そりゃあ、降って湧いたような謎だらけの隠し子の扱いに、親戚は頭を悩ませたけど、天下一品に能天気な親が「私たち、男の子、もう一人、欲しかったのよね！」「夢は諦めるもんじゃないな！母さん！」とはしゃいだことで、場を白けさせつつも、万事解決。

で、俺にとって、十歳下の叔父ながら、弟のような存在ができたわけだ。

ここ十年くらい、親戚一同とは没交渉で、世捨て人のように暮らしていた祖父だけど、梢には抜かりなく、教育や躰をしたらしい。

幼稚園や学校に通っていなかったというも、年並みに体の成長を遂げつつ、社会的知識、勉学の知識、コミュニケーション能力、運動能力を備えていた。

とはいえ、祖父と引きこもりがちだったようなので、礼儀正しい、いい子ちゃんながらも、人に接する態度は堅苦しかった。

会ったばかりの親戚の家に住むとなれば、肩身の狭い思いもしてだろう、中々、打ちとけられず、敬語を使うのもやめられずに。

ただ、他人行儀にされるのを寂しがった親を尻目に、はじめから、俺

は懐かれていた。

というか、ずけずけとタメ口を叩かれたもので。

「鉄治」と呼び捨て上等に「おっさんくさい」を口癖に、ダメだしをされてばかり。

小ざかしく、いちいち的を射た指摘をするのに「なんだよー、んなこと、いうなよー」と悔しがって、ふてくされたものを「年上の口の利きかたがなっていない」と注意したり、叱ったりはしなかった。

ふだんから、いじられやすく、後輩に子馬鹿されるのも日常茶飯事で、慣れっこだったし、えげつない先輩に比べれば、十歳児の生意気さなんて、愛らしいものだったし。

それに、二人きりのときだけ「鉄治」「鉄治」と憎たらしい口調ながら、しきりに呼ぶのが、甘えているようで、満更でもなかったし。

了承をしないうちに、胸倉をつかんで起され、抱きしめられた。上から顔を寄せて、上唇を舐め、開いた隙間から舌をねじこむ。

まだアルコールが抜けない体は無気力だし、思春期を含めた七年を、取りもどすような勢いで求められては、逃げようがなかった。

俺だって、かなりのご無沙汰だったから、口内の粘着質な生温かさに快くなって、もっとももっとと、舌を差しだしてしまふ。

思えば、キスをしたのは、そう、ちょうど十年ぶり。

大学に入ると同時に彼女ができたものの、梢を引き取った直後に別れた。

それからは、梢にかまけていたこともあり、縁がなく、大学卒業後は仕事に追われて、暇がなく。

「あれ？ どうして彼女と別れたんだっけ？」とほんの余所見に考えた
ら、背骨をなぞるように、指で撫でられた。

「は、あ・・・！」と肩を跳ね、甲高く鳴くも、すぐに唇で覆われ、
息つかせず、ぐちやぐちやと口内を荒らされる。



愛を知らない彼は俺を貪る

「あらあ、もう、相原くんがくるころなのねえ」

「献血カード」を差し出したのに、受け付けのおばさんが、にこやかに受けとる。

おばさんの言葉から、お分かりの通り、僕は、この献血センターの常連だ。

決められた期間を空けて、水曜日にセンターに通うのを、ここ一年、つづけている。

「高校生なのに、ほんと偉いわあ。

今、ちょうど、桜川くんの手が空いているから、すぐに、できるわよ」
誉めてくれたのを笑って流してから、指定された番号の診療チェアへと向かう。

「やあ、相場くん、久しぶり」と迎えてくれた若い男は「って感じがしないな」と軽口を叩くあたり、受け付けのおばさん以上に、常連の僕とは気心が知れていた。

というのも、桜川さんは、僕専属に血を抜いてくれる人だからだ。
本来は「この人に血を抜いてもらいたい」なんて指定はできないけど、僕の場合は訳があつて。

血管に針を刺しにくい腕をしているので「どんな腕だろうと刺せない針はない」と定評の桜川さんしか、対応ができなという。

「どうしても桜川さんじゃなきゃ、やだ！」と駄々をこねたわけではないものを、物腰柔らかく、人当たりがいい桜川さんが専属になったのは、棚から牡丹餅だった。

なにせ、血が抜かれるとき、体が芯まで冷えて、目が回るものだから。堪らず「一人でいると耐えられない」と訴えたのを、聞き入れてくれたのは、お人好しな桜川さんだからこそ、だろう。

もう一年以上、献血しているとはいえ、いまだ肩を震わせ眩暈を起す僕に、つきつきりで手を握りながら語りかけ、気を紛らわしてくれている。

語るのには主には仕事こと。

献血センターのあれこれをはじめ、本業の看護師として勤める（週一で献血センターに派遣されるといふ）病院での珍事件、珍患者などを、面白おかしく聞かせるものだから、眩暈より、嘔きだすのを堪えるほうが、困ったり。

看護師の仕事内容自体、興味深かったし、今や、献血だけでなく、桜川さんのおしゃべりを目的に、センターに通っている節があるほどだ。

今日の語りは、献血センターにまつわる怪談のようなもので、夜遅く、忘れ物をとりに戻ったところ、輩っぽい人を見かけたのだとか。

頬から手を滑らせ、うなじを掴んで、引き寄せた。

僕の肩に顔を埋めさせたなら、耳元に頬ずりするようにして囁いて。

「新鮮なまま飲まない」と

耳たぶを唇で食むと、顔をぶるりとしたものを、突き放したり、上体を退けることなく、僕の首に噛みついてきた。

勢いよく歯が食いこんだのに「ぐうっ！」と呻きつつ、むしろ、うなじを掴む手の力をこめる。

吸血鬼であるまいし、ましてや、桜川さんに犬歯や八重歯はないのだろう。

いくら齧っても、肌は裂けることなく、苛ただしそうに、歯で挟んで引っぱったりしている。

案外、痛くはない。

いや、桜川さんが僕の血を欲してやまずに、もたらす痛みなら快くて「ふ、あ・・・」と熱く吐息し、うなじに爪を立てる。

血濡れた少年は嘲笑う



俺の通うスイミングスクールには、人魚姫がいる。

もちろん、仇名だけど、相手は中学生男子だ。

そう称されるだけ、スクールで一番の成績を誇りつつ、容姿端麗。しかも、白人と日本人のハーフで、某世界的アニメの彼女のように、赤毛で青みがかった、ぱっちり、お目目をしている。

白人特有の、透きとおった肌色をしながら、日本人らしい、きめ細かい肌質も兼ね備え、おまけに乳首はピンク。

まだ本格的な成長期に突入していないようで、同年の女子より背が低く、そう筋肉質でないとあり、スイミングスクールで上半身裸なのは当たり前でも、どこか目のやり場が困ってしまう。

長い睫毛を伏せて、流し目をしようものなら、お年ごろな男子は、くらっときそうなところ。

が、スクールの、むしろ男子のほうが、警戒をしていた。魔性の人魚姫の疑いがあるからだ。

一年前のこと。時代錯誤に精神論を至上とするコーチがいた。

「努力すれば報われる！」「諦めないことが第一だ！」と猪〇節に励ますばかりで、経験や専門的知識を生かしての指導をせず、まあ、暴力や暴言をしないから、そう害でもなく。

生徒が白けようと、かまわず「元気があれば、なんでもできる！」と高笑いをするのが、どこか憎めなかったし、大会などで、お通夜な空気になっても、おかまいなしなあたり、助けられることもあって、なんだかんだ生徒は慕っていた。

が、ある日、突如、スクールをクビになってしまい。

なんでも、人魚姫にいかかわしい行為をしたのが発覚したとかで。

「人は見かけによらないな」と一言で、とても片付けられないほど、生徒らはぴんとこなかった。

頭を撫でたり、肩に手を置いたり、背中を叩いたり、生徒に触ることはあっても、ほぼ一瞬で、逆にべたべたするほうでなかったし。なにより、人魚姫のことが眼中になさそうだったし。

スポ根漫画のキャラのようなコーチと、リアル少女漫画の人魚姫との相性は、見た目通りによくなかった。

というか、あの博愛主義なコーチにして、人魚姫を疎んじていた節がある。

曰く「お前は心から、水泳を愛していない」と。

百歩譲って「純粋な水泳馬鹿に見えたコーチにも裏の顔があったのだろう」と飲み込んだとして、それでも、どうしても拭えない疑問がある。

騒動発覚後も、一日も休まず、人魚姫がスクールに通いつづけたこと。

こういう場合、好奇の目を向けられ、変に気遣われるから、被害者で

あつても、なんとなく疚しく、居たたまれなくなるもの。

はずが、コーチがクビになったのを知らされた直後も、なにくわぬ顔をして、心なし、口角が上がっているように見えた人魚姫。

自分の美貌と華麗な泳ぎに魅了されない、とくに男が許せない。

そう思っているのではないか。

突然のコーチ解任騒動で、そんな印象を持ったスクールの男子らは肝っ玉を冷やし、コーチの二の舞になるまいと、人魚姫の機嫌を損ねないよう、日々、注意を払っている。

距離を置きすぎず近づきすぎず、顔色を窺って揉み手を欠かさない。

で、まさに「姫」のように彼は、中学生グループに君臨をした。

コーチも口ごたえできない、独裁的な空気だったのが、新たなコーチがきてから、風向きが変わって。

新たに就いたコーチは、人魚姫が恋する王子うってつけの、脳天からつま先まで清涼感溢れる若いイケメン。

精神論至上主義とは真逆に、大学院で研究をしていたとあって、インテリらしいアプローチをした。

やや理屈っぽいとはいえ、的確で分かりやすい指導をしてくれるし、親しみやすくもあり、人懐こい笑みで、男子らもきゅんとさせている。

見た目も性格も満点の新コーチは、気高い精神もしており、できるだけ、公平平等に生徒を扱った。

そう、人魚姫がぶりっ子をして、鼻の下を伸ばすことはない。

シヨタコンホイホイに引っかからず、独裁的な空気も読まないコーチは、さらに異例なことに、俺に目をつけた。

しかも、練習が終わって「先生、僕、分からないことがあってえ」と腕を組んできた人魚姫を「悪い、今度な」と退けて、だ。

水着にトレーナーを羽織った格好で、胸と腰、太もも、手を後ろに、足を前に縄でくくられている。

身動きがとれないながら「やめてくれ!」「なにを怒っているんだ!?!」と滝のように汗を滴らせるコーチを、頭の中から足のつま先まで写してから、「コーチは俺に指導をしたでしょ?」と喚く口に手を当てた。

「もっと指先まで神経を使って、一つ一つの動作を丁寧にしろって。

なに?

人魚姫という、あだ名のくせに繊細じゃなくて、みっともなく泳ぐ、がさつな奴って、デイスっているわけ?」

「そんなこと・・・!」と声高に返そうとして、口から滑らせた手で、首を絞められ、息を飲む。

さほど力は込められてなさそうとはいえ、対面する人魚姫がどんな顔

をしているものやら。

顔を青白くし、震えるばかりで、口を利かなくなったのを、笑ってか、画面が揺れる。

しばし首を撫で、つつと滑らせ、鎖骨、肩、脇へと、指を伝っていった。

なるほど、見惚れるほど、繊細でしなやかや、躍るように肌を這う優美な指使い。

と、前にした指導を前言撤回したところ、涙目で頬を上気させる新コーチは、胸を揉まれて、唇を噛んだ。

顔を振って、涙を散らし「う、ぐう」と呻く。

「ほら、身を持って、俺が人魚姫の名にふさわしいかどうか、判断してよ」

尖った爪で乳首を引っかかれて「は、あ、う、ん・・！」と口の隙間から、濡れた息と涎を漏らし、顔の赤みを首まで広めていく。

ちようど縄に引っかかるものだから、身悶えるにつれ、いじっていないほうも、乳首を腫れさせ、そのうち腰を揺らしだした。

気づいて、画面が下を向き、閉じた足の間から、せり上がったのを写す。

